

2. 「鳩」「雀」「鶴」から教えましょう

幼児は実体に即して考える

幼児は、実体に即した言葉は理解できますが、実体のない言葉は理解できません。多くの人は、よく、

鳩を見ても雀を見ても、これを「鳥」と教えます。しかし、鳥という名の鳥はいませんから、鳩は鳩、雀は雀と教えるべきです。鳩や雀が解ってから、それを統合する言葉として「鳥」を教えるのです。

「お母さん」という言葉にしても、初めは自分の母親だけを表す言葉としてしか、理解できないものです。そういう認識の段階にある時には、「友子さんのお母さん」という言葉が、理解できなくて、「それはお母さんじゃあない。お母さんはここ」と言って、自分の母親を指します。

幼児は、このように、実体に即して言葉を理解しますから、実体のない、抽象的な言葉を早く与えるべきではありません。

鳩も「鳥」、雀も「鳥」、鶴も「鳥」と教えたのでは、幼児には理解できません。まず、実体に即して、「鳩」「雀」「鶴」を教え、それらに共通し

ている点、“翼がある”“羽毛が生えている”“足が二本”、そういう認識を通して初めて、「鳥」という言葉を教えるのです。

そうすれば、「カナリヤ」を見ても、その名前は解らないが、「鳥」の仲間である、という理解が出来るようになります。

漢字は、実体に即した漢字なら、二歳児でも十分に理解できます。一歳児でも30%は理解します。

漢字はすべて、言葉と同じように、実体に即して教えるのですが、この場合は“漢字、言葉、実体”と、この三者を結びつけて一緒に教えます。

つまり、「鳩」という字が「はと」と発音できただけでは不十分で、鳩

コ ラ ム

部首 欠

を大きく開いた人の形。だから「あくび」という名がある。“口を開く”こと、“あくびする”こと。

【次】 二と欠の会意形声字。二番目で結構、とだらけた気持であくびしている状態を表した。

【歌】 “ を開いてよい声(可)を出す”こと。

そのものが頭に描き出されなければなりません。言葉は、実在を思い起させる“聴覚的信号”であるのに対して、漢字は、“視覚的信号”です。実体に即した漢字は、どんなに難しそうに見えるものでも、幼児にとっては難しくありません。難しいと思うのは大人の考え方で、誤った先入観によるものです。漢字を幼児に与える場合には、この先入観をぜひ捨て去る必要があります。

牛乳瓶には「牛乳」の字がありますので、これなどは、正に実体に即してすぐ覚えられる漢字です。牛乳の実体と「ぎゅうにゅう」という言葉はすでに結び着いているでしょう。それに「牛乳」という漢字を結び着けるのです。

この場合、「牛乳の牛は『うし』とも読めて、乳は『ちち』とも読めるのよ」とすぐ教えたがるのですが、これはいけません。その教え方では、実体に即していません。「牛」という漢字は、実在する牛に即して別の機会に教えなければなりません。

実体に即して「牛」を教えた場合でも、「この字は、前に教えた『牛乳』の『牛』ですよ」などと言ってはいけません。

子供が気が付いて「お母さん、牛という字は、牛乳の牛と同じ字じ

ゃないの」と言った時に、「えらいわねえ、気が付いて。牛乳って、牛の乳なのよ。だから、牛の乳と書いて『ぎゅうにゅう』って読むのよ」と教えます。

体験を通じて覚えさせる工夫が必要

牛乳瓶で「牛乳」を覚えさせるように、文字通り、実体に即して漢字を教え

る方法があります。机に「机」、本立てに「本立て」、壁に「壁」、花瓶に「花瓶」というように、漢字を書いた紙片を貼っておくのです。

コラム

部首 心

心臓の象形。心臓が本義で転じて、“精神作用をつかさどるころ”となった。

【念】 今の心という意味の会意字。現在ああしたい、こうしたいと考えている心。

【忍】 心を刃物で突き刺されるような思いにも“たえしのぶ”こと。

こうして、「洗面所」「台所」「水道」「洗面器」「箸」「茶碗」「絵本」「鉛筆」「一輪車」「電話」「鏡」「鏡台」……など、漢字で書き表せるものは、何でも利用することができます。

この応用で、「熱い」「冷たい」という漢字を教えることができます。二本の牛乳瓶に、一つは「熱い」他は「冷たい」という漢字を書いた紙を貼付け、それぞれに、熱湯と氷水を入れておくのです。

子供は、この二つの瓶に触れることにより、“熱い”ことの体験と、“冷たい”ことの体験をし、その体験を「熱い」「冷たい」という文字に結び着けるのです。

こういう学習で、子供は、「熱い」という字を見れば、熱かった経験を思い浮べ、その感触を思い起し、「冷たい」という漢字を見れば、冷かった経験を思い起し、その感触をまざまざと思い浮べるでしょう。

このように、漢字が読めるということは、「熱い」という漢字を「あつい」と発音できることではなくて、それ以上に、その体験、その感触を呼び起すことでなければなりません。

「長い」「短い」「重い」「軽い」「大きい」「小さい」「太い」「細い」「広い」「狭い」……こういう漢字は、「熱い」「冷たい」と同じようにして教え

ることができます。

マッチ箱を二つ用意して、一つには鉛などの重い物を入れて、これに「重い」と書いておき、もう一つには綿でも入れて、これに「軽い」と書いておくようにします。

「長い」「短い」は、使い古しの二本の鉛筆でもよく、この場合は、カードに漢字を書いて、糸で鉛筆に結び着けておけばいいでしょう。

「丸い」「四角」「三角」「白」「黒」「赤」「青」など、こうして教えられるものはいろいろありますので、創意工夫されて良い方法を作り出すことが大切です。